

中国の一級文物が学習院へやって来た—福建展始末記—

荒川 正明

はじめに—初の「美術品」展

平成二二年（二〇〇九）四月一三日から五月一八日に行われた「東アジアの海とシルクロードの拠点 福建」展は、学習院大学史料館にとつてきわめて画期的な催しであった。それはむしろかなり破天荒な展示であったともいえよう（写真1・2）。

その理由は、これまで学習院の収蔵品を中心として主に歴史史料の展観を中心にしてきた史料館が、本来は美術館が開催すべきレベルの美術品の展示に挑戦したからである。



1 展示場入口



2 展示風景



3 加彩十二生肖俑（牛）・（鶏）



4 加彩官人俑

たとえば中国の「重要文化財」とでもいうべき一級文物は、「加彩十二生肖俑（牛）・（鶏） 五代時代」（写真3）、「加彩官人俑 五代時代」（写真4）、「銀卷雲文合子 南宋時代」（写真5）、「銀鍍金碗・托杯 南宋時代」（写真6-1・6-2）、「青白磁蓮華形香炉 宋時代」（写真7）、「蛙形石製硯 宋時代」（写真8）、「白磁観音像 明時代」（写真9）という九点を数える。まさに公的な美術館や博物館で開催されるべき質の高い美術作品を多数含む展観であった。

客観的に見て史料館の設備が、美術展示に相応しい安全性（地震対策および防犯上の備え）を確保できていたかどうかはなんとも心許ない。これまで歴史史料の展示を中心にしてきた方針から、この点に関してはやむを得ないというべきであらう。

安全性や展示面積、そして展示設備に限界のある史料館展示室という施設で、今回このような質の高い展観が開催出来た背景には、史学科鶴間和



7 青白磁蓮華形香炉



8 蛙形石製硯



5 銀巻雲文合子



6-1 銀鍍金碗、6-2 銀鍍金托杯



9 白磁観音像



10 明治大学博物館展示風景

幸教授をはじめとする学習院大学アジア研究教育拠点事業に関わったメンバーの方々の熱意、そして各方面からの協力や支援、さらに福建省博物院などの所蔵館の多大な理解を得られたことがある。まことに画期的なことであったと思う。そして何よりも展覧会を成功裏に終了出来たことは、今後の史料館での展示活動の可能性を大きく広げる結果となった。

入場料は取らないのか？

他の巡回先である愛知県陶磁資料館や山口県立萩美術館・浦上記念館などでは入場料を取っていた。これだけの質の高い展観である点から、大人一〇〇〇円（学生八〇〇円）という価格であった。とくに、共同開催館である明治大学博物館でも入場料（大人五〇〇円）を取っており、ほぼ同じ内容構成である学習院も他館との足並みをそろえるべきとも考えられた（写真10）。しかし、学習院では史料館で入場料を取る前例はなく、学生以外の一般来場者であっても大学当局の判断で無料となった。

入場料に関しては、今後とも十分に検討されるべき点かと思われる。将来、今回と同じような質の高い美術展覧会を開催する場合、当然のことながらかなりの費用がかかる。本学の学生は無料としても、はたして外部か

らの入館者までも無料にする必然性があるのかどうかは検討の余地がある。展覧会事業の収支の問題を含めて十分な議論が必要であろう。

美術作品を展示する

ご存じのように文学部棟内にある史料館の展示面積は八八㎡しかない。このきわめて限られたスペースのなかで、いかに魅力的なディスプレイを構成するか、そこに大きな課題があった。

せっかく美的価値の高い作品が並ぶわけであるから、その魅力を十分伝える展示が重要であると判断された。作品を美しく見せるためには、今回は年代順に並べていくことに拘る必要性はないと私は考えた。作品との出会いによる美的感動はきわめて重要であり、美術館はその体験が深く心に染み込むような作品の置き方を心がけるべきであろう。

今回の展覧会では、私は史料館をあくまで美術館と想定して陳列案を練ってみた。

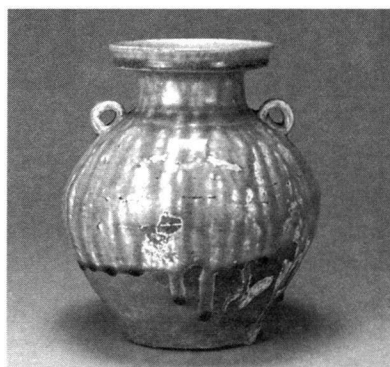
会場構成は、大枠で以下のような四つのコーナーに区別した。

- (一) 古代から中世の福建
- (二) 沈没船の語る世界
- (三) 茶文化と茶陶の世界
- (四) 窯跡出土の陶片資料

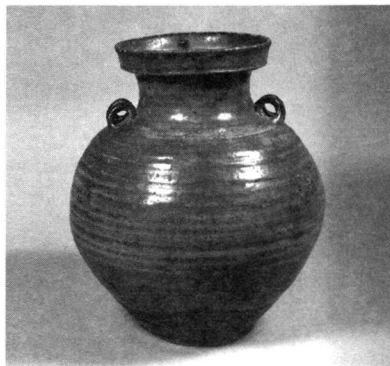
古代から中世の福建

高さ二、六五メートルの大きな壁付展示ケースを利用した。新たに壁を白色系のクロスで統一し、作品がケースのなかで映えるような工夫をした。さらに、工芸品が多数を占める展示なので、ケース内に展示台を加え、地上八〇センチの高さに設定した。

ここでは、何と言っても福州の五代時代の劉華墓出土の俑（加彩十二生肖俑（牛）・（鶏））（写真3）が見どころと考え、壁ケースの最初に置い



11 青磁双耳盤口壺



12 青磁双耳盤口壺 法隆寺蔵

てみた。予想通りこの二体の俑は人気者となり、絵葉書の売上ナンバー一となった。

そして、その次には福建における唐・宋文化の色濃い影響を考えさせられる「青磁双耳盤口壺」（写真11・12）「銀鍍金碗・托杯」（写真6―1・2）「青銅管耳扁壺」などの秀作を置き、その美しさを堪能していただくような比較的間隔を空けてゆったりと配置するように心がけた。

地震対策として、すべての作品にはテグス糸を使って台の上に固定するようにした。

沈没船の語る世界

このコーナーでは、近年にわかに活発化している福建省の水中考古学の成果をまとめて展示した。時代順に異なる四か所の水中から引き揚げられた遺物を選び、時代の推移によって貿易陶磁の種類が変化していく様子を分かりやすく展示するようにつとめた。ここでは大量に引き上げ遺物の雰囲気を出すために、磁器が幾重にも重なり合うような様子にあえて置いてみた。

茶文化と茶陶の世界

このコーナーでは茶湯を嗜む多くの層に楽しんでいただけするように、「北苑茶園」の資料と茶道具（建蓋・「灰被天目」「褐釉小壺（茶入）」を並べた。

とくに茶湯の展示の雰囲気や少しでも醸し出せるように、ここでのうつわを紫色の袱紗の上に乗せてみた。福州出土の「褐釉小壺（茶入）」は陶製の共蓋となっており、国内の茶人には全く認められないもので、多くの観衆者から注目を浴びていた。

福建産の唐物天目が日本に到来したのは、早くも平安時代後期（一二世紀後半頃）と考えられる。中世都市の博多や京都など、日本の各地の遺跡から唐物天目の出土事例が知られているのである。それ以来、現代までおよそ九百年近く私たち日本人は天目と親しんできたことになる。

しかし、じつは天目を生んだ中国では、その天目の生産は福建省・建窯では二三世紀、灰被天目を産した福建省・茶洋窯ではほぼ一四世紀に、それぞれ生産を終了させてしまう。ところが、日本では天目への愛着は衰えることなく、室町時代から桃山時代までアンティークの唐物天目を求め続けた。さらには京都の御室窯、そして瀬戸や美濃の窯でも和物天目を、一七世紀後



14 織部鉢

期まで延々と生産し続けるのである。そして、画的なこととして、最初の唐物天目が到来しておよそ四百年後の桃山時代、日本では独特の黒い茶



13 陶磁器の展示風景

碗を誕生させた。それは漆黒色に輝く、変化に富んだ姿の茶碗である。

美濃窯では一六世紀初期の大窯開窯以来、黒色の茶碗としては黒褐色の釉薬である天目を専ら量産していた。これは中世以来、富裕層のステイタスシンボルとされてきた中国福建省の建窯産の建蓋天目、いわゆる唐物天目を模倣したもので、美濃窯の天目釉は黒色といっても暗褐色に近い色調であった。

また、このコーナーの最後には、懐石器や宴のうつわに使用されたと考えられる漳州窯産の華やかな「五彩盤」や「青花盤」を並べた（写真13）。

華南三彩のとくに皿・鉢・合子などは、全国の近世の都市遺跡から、近年発掘報告が相次いでいる。華南三彩を目にした当時の日本人は、絵画にはない色彩の輝きに大いに目を奪われたことであろう。古くは唐三彩に行き着く鉛釉のエキゾチックな味わいに、桃山人は特に異国情緒を感じたに違いない。

日本人は、海の彼方にある理想郷を長く信じていた。海の向こうにある常世（仙境）の国とは、温かい南の楽園のイメージに包まれていた。その楽園への憧れを、華南三彩のまばゆいばかりの鮮やかな色彩に投影したに違いない。華南三彩の緑彩や黄彩の輝きは、その後日本のやきものに移植され、宴のうつわや茶道具のなかに表現されていった。

まず、桃山時代後期の美濃窯で、織部焼が誕生する。この織部焼には華南三彩の緑彩が取り込まれる。「片身替」とよばれうつわ半面のみに緑釉をかけるスタイルで、桃山時代の傾いた美意識やエキゾチシズムを演出する（写真14）。

さらに、一七世紀中期には肥前窯の色絵磁器（古九谷様式）に、緑・黄の二彩で塗り埋めたいわゆる青手が登場する（写真15）。青手は華南三彩に倣うようにして、うつわの外周まで緑・黄で塗り尽くし、大皿はハレの宴の場を飾るメインディッシュとして用いられたのだった。



15 色絵山永文大皿 古九谷

この青手は、絵画のように線を重視するのではなく、色だけでモチーフを描いてゆく。言い換えれば、なにかあるモチーフを描こうというのではなく、ただ色彩の組み合わせの妙を楽しむだけなのである。絵画の世界には存在しない、いわゆる「色画」とでもいうべき意匠がやきものの世界に確立したのである。それは、つまり濃厚な緑と鮮明な黄という二色の葛藤であった。この二色をいかに面白くかつ劇的に、限られた器面に対置させるかということに尽きるデザインであった。まさに現代の抽象芸術に近い表現法にまで到達していたのであった。

そして、華南三彩の色彩法は江戸時代後期にも、京都の奥田穎川、青木木米、仁阿弥道八らが盛んに応用していったのだった。それは、いかにも一九世紀後期フランスの印象派の画家たちが、日本の浮世絵からインスピレーションを受け、革新的な画風を確立した光景に重なって見える。日本の陶工たちは福建のやきものに楽園のイメージを投影して、その色鮮やかなうつつわへの憧れを抱きながら、新たなハレのうつつわを創造し続けたのである。

窯跡出土の陶片資料

窯跡出土の陶片は重要な歴史資料であるので、なるべく多数を展示したいと考えた。とくに貿易陶磁として日本へと多数もたらされた主要な窯跡（懷安窯・磁窰窯・南安窯・徳化窯・漳州窯など）を網羅することにした。これらの窯のスタイルは、日本のやきものにも大きな影響を与えている。日本陶磁の造形は、古代以来日本に輸入されてきた中国陶磁との間合いを計りながら、展開してきたようにみえる。ある時代は中国陶磁に追随し肉薄するために、中国陶磁のスタイルをモデルとして写す。あるいは、他の時代は意図的に中国陶磁の影響からあえて遠ざかるために、和風スタイルを創造する。常に中国陶磁の動向を視野に入れながら、とくに日本の高級什器は変遷を重ねてきたのである。日本の窯業生産は質量ともに、圧倒的な偉容を誇る中国陶磁の巨大な影に脅かされながら、活動を継続してきた。

た。とくに九世紀以降に本格化する中国陶磁の国内への圧倒的な輸入の状況は、すでに多くの成果によって明らかになっている。

とくに中国・福建のやきものは、日本のハレの宴席に使われた什器や茶道具（抹茶および煎茶）の世界に、計り知れないほど大きな影響を与えた。古くは南宋時代の建窯の「天目」（建盞）や同安窯系の青磁碗、明末清初では福建省漳州窯の「呉須赤絵」や「華南（交趾）三彩」の大皿や鉢、さらに清時代では徳化窯の白磁などは、時代を超えて日本のやきものに造形の規範を与えてきた。それは、単に福建のやきものが貿易商品として到来したからではなく、その背景には人と人との深い交流が存在したに違いない。だからこそ日本の習慣のなかに福建のやきものが深く根をおろすことになったのである。

陶片は重要な歴史資料であるが、あくまでも考古遺物であり、展示では伝世された美術品とは一線を画したいと思った。そこで、入口から向かって右側の窓際沿いに覗きケースを並べ、そこに一括して置くようにした（写真16）。観衆者からは、見やすいというご意見のある一方で、陶片をケースいっぱい詰り込めただけに見づらいというご指摘もいただいた。

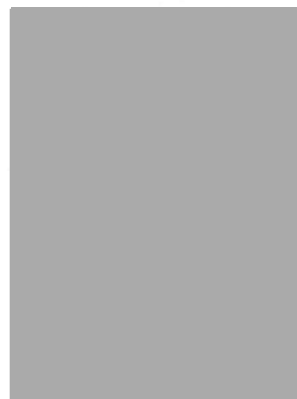
ところで、今回の展示の最大の目玉である一級文物の二つの立体像、「加彩官人俑」（一〇世紀頃）と「白磁観音像」（一六世紀）とを独立ケースに入れることとした。いずれも三六〇度の角度からも眺められるように制作されている。これを壁ケースに入れ、単に正面からしか見られなくすることは大変残念なことである。よって独立ケースに単独で入れることに決定し、その独立ケースを愛知県陶磁史料館からお借りし、その他にレンタルでお借



16 窯跡出土陶片の展示コーナー



17 加彩官人俑



18 白磁観音像

りすることとした。

「加彩官人俑」(写真17)は唐風の造形を感じさせる逸品で、穏やかであり気品を感じさせる表情はなんとも魅力的である。表面に塗られた彩色はほとんど失われているが、むしろ白い胎土による素地の味わいもまたなかなか良い。何よりもこの時期のこれだけ見事な像は、日本ではほとんど見ることのないものである。

「白磁観音像」(写真18)はまさに徳化窯の類品中でも頂点に位置づけられる作である。衣が微妙に波打つかたちや指先のしなやかさなどはじつに見ごたえがある。妖艶なその姿やポーズからは通常の「観音像」とは異なる要素が感じられる。この種の観音像は西洋にも輸出された可能性が高く、その点からもむしろキリスト教のマリア像からの影響も感じられる。「何朝宗」銘から一六世紀後期に活躍した名工の作であることが明らかである点も重要である。

おわりに

ともかく、中国の一級文物をいくつも含む質の高い展覧会が何事もなく

無事終了し、およそ三千人近い来館者を迎えることが出来たことは、今後の史料館の活動にとって大いなる自信にもなり、かつひとつの重要な画期になったと考えられる。

そして何よりも多くの学生諸君が質の高い福建文物に直に触れ、身近に見学する体験は、とくに重要な教育の場となった。

今回のような質の高い美術展覧会が、これからも学習院大学で継続的に行われていくことを私は熱望している。

注

写真1・2・13・16・17・18 学習院大学アジア研究教育拠点事業提供

写真5・8 海のシルクロードの出発点「福建」展開催実行委員会「東ア

ジアの海とシルクロードの拠点 福建―沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化―」(二〇〇八年)より転載。

写真3・4・9・12・14・15 著者提供